

日時 2006年12月9日(土)

会場 桃山学院大学 〒594-1158 大阪府和泉市まなび野1-1 TEL: 0725-54-3131 (代) URL: http://www.andrew.ac.jp

大会受付 9:00~ [1号館2階エントランスホール]

書籍展示 10:00~18:00 [1-302] ・会員控え室(休憩室) [1-307]・ 講師控え室(休憩室) [1-308]

昼食 「聖バルナバ館」2階キャファテリア(土曜日の営業時間は10:30-13:30)・
 「聖マーガレット館」2階食堂(土曜日の営業時間は10:30-17:00)・
 「カンタベリー館」1階フアーストフードコーナー(土曜日の営業時間は11:00-14:00)

ワークショップ (10:00~11:40)

[1号館3階·全5室]

1. 10:00~10:25 2. 10:25~10:50 3. 10.50~11:15 4. 11:15 ~11:40

 1室[1-312]「モダリティとアスペクトの語用論」 1. 英語(擬似)法助動詞構文と動機づけ 2. 意志は will の外から来る: 意志・動作主・主体化 3. 領域副詞と法助動詞 4. 視点の共有と Reference Point 	司会 澤田治美 (関西外国語大学) 長友俊一郎 (関西外国語大学非常勤講師) 片岡宏仁 (関西外国語大学大学院生) 岡本芳和 (関西外国語大学非常勤講師) 岩田真紀 (京都府立嵯峨野高等学校)
 2室[1-311]「対人関係の語用論」 司会 1. エコー標識としての「やはり・やっぱり」 2. 力関係(power)の均衡を維持する 言語的ストラテジー 3. 否定的認知環境における沈黙の解釈 	東森 勲 (龍谷大学) 千田 愛 (大阪大学大学院生) 町田佳世子 (北海道東海大学) ダフィー美佐 (奈良女子大学大学院生)
4. 精神療法面接における心理文と不安喚起との 連関とその緩和表現	加藤澄(青森中央学院大学)
4. 精神療法面接における心理文と不安喚起との	加藤 澄 (青森中央学院大学)

4室[1-306]「日本語語用論」	司会	杉本孝司	(大阪外国語大学)
1. 授与関係を示す補助動詞の語用論的考察		松尾貴哲	(神奈川大学大学院生)
—「て~やる/て~くれる/て~もらう	ð] —		
2. 複合格助詞「にとって」の生起条件につい	て	神戸百合香	(筑波大学大学院生)
3. 日本語の「直示的アスペクト」について		澤田 淳	(京都大学大学院生)
4. 日本語らしさについて―「ものだから」の		松田瑞江	(早稲田大学大学院生)
考察を通して			
5 室[1-305] 「語用論と構文の使用」	司会	李 在鎬	(情報通信研究機構)
1. 英語形容詞の意味拡張:形式と使用の		渋谷良方	(情報通信研究機構)
関係について			
2. 使役構文の拡張と語用論的条件		鄭 聖汝	(大阪大学)
3. 名詞一語を「文」たらしめるのは何か		横森大輔	(京都大学大学院生)
一構文成立における意味フレームの役割-	_	山嵜章裕	(京都大学大学院生)

総会(12:40~12:55)

[2号館3階:2-301 (ハイビジョンシアター)]

	司会林宅	男 (桃山学院大学)
1. 会長挨拶	澤田治	美 (関西外国語大学)
2. 事務局長報告	林宅	男 (桃山学院大学)
3. 編集委員会報告	山梨正明	明 (京都大学)
4. 会計報告	山本英-	ー (関西大学)
5. その他		

研究発表(13:00~15:30)

[1号館3階·全5室]

1. 13:00~13: 35 2. 13:35~14:10	3.	14: 20 ~ 14:55	4. 14∶55 ~ 15∶30
1室[1-312]	司会	内田聖二	(奈良女子大学)
1. ねじれた条件節を持つ条件文の分析		コルクサ,ア	リ アイジャン
			(北海道大学大学院生)
		加藤重広	(北海道大学)
2. 日本語比較文の2重基準性について		澤田 治	(シカゴ大学大学院生)
(10	分休憩)	
	司会	田中廣明	(関西外国語大学)
3. 構文の確立と語用論的強化 : 「全然~ない」		尾谷昌則	(東北学院大学)
の例を中心に			
4. 否定疑問文の語用論的機能に関する考察		山嵜章裕	(京都大学大学院生)
		横森大輔	(京都大学大学院生)
2室 [1-311]	司会	彭 国躍	(神奈川大学)
1. 比喩表現における意味論的主観性と		岡本雅史	(東京工科大学)

語用論的主観性					
2. 嫌みを導く要因 : 周辺的アイロニーからの考察	春木茂宏	(近畿大学)			
(10分休憩))				
司会	西山佑司	(明海大学)			
3. 修辞疑問文の発話解釈に関する一考察	後藤リサ	(奈良女子大学大学院生)			
4. 数詞を伴うトートロジー	山本尚子	(奈良女子大学大学院生)			
3室 [1-310] 司会	橋内 武	(桃山学院大学)			
1. 英語アニメーション映画における日本語サブタイト	・ル				
―サブタイトルの表現性について―	永山友子	(神奈川大学非常勤講師)			
2. 連結的知覚動詞構文の主語をめぐる問題	徳山聖美	(神戸市外国語大学大学院生)			
ゼロ形として表される知覚の主体					
(10分休憩)					
司会	久保 進	(松山大学)			
3. 外国語習得における「共同注視」と「身体性」:	中野研一郎	(京都大学大学院生·			
認知言語学原理を用いた外国語習得環境の構築		京都府立桃山高等学校)			
4. 2~4歳児における不確定性を示す文末助詞「かな					
幼児音声データベースを用いた機能の分析	橋本亜井	(京都大学大学院生)			
	松井智子	(京都大学)			
	天野成昭	(NTT コミュニケーション			
		科学基礎研究所)			
4室[1-306]	武内道子	(神奈川大学)			
1. 談話管理から見た標識「まあ」について	水野吉徳	(富山大学大学院生)			
2 スケールに作用する表現としての「まあ」	川田拓也	(京都大学大学院生)			
(10分休憩	()				
司会	高原 脩	(神戸市外国語大学名誉教授)			
3. 日本語疑問文で起こる後置の談話機能について	及川佳寿子	(東北大学大学院生)			
4. 連結発話と非連結発話をめぐって	海寳康臣	(立命館大学)			
5 室 [1-305]	児玉徳美	(立命館大学名誉教授)			
1. Extended Reference in Blended Contexts	安原和也	(京都大学大学院生・			
		日本学術振興会特別研究員)			
2. 定冠詞 the の機能と関連性理論	今野昌俊	(専修大学大学院生)			
(10分休憩)					
司会	中村芳久	(金沢大学)			
3. フランス語 le 定名詞句の照応	出口優木	(京都大学大学院生)			
―非同一性照応からのアプローチ―		/ [-fo 107] \-\			
4. 「あげる」と「くれる」の受益性について	野澤元	(情報通信研究機構)			
一話し手の利益と共益関係の観点から―	横森大輔	(京都大学大学院生)			
	白土保	(情報通信研究機構)			

ポスターセッション(11:00~13:00)

[1号館3階:1-313]

1.	数量詞遊離構文の意味用法			
	一日中対照的立場から一	洪 雅琪	(東北大学大学院生)	
2.	疑問文文末における終助詞「か」の付加と省略	に関して		
	一日本語母語話者と日本語非母語話者の初対面会話データをもとに―			
		工藤聡子	(東京学芸大学大学院生)	
3.	Procedural Meaning of "Pragmatic Sluicing" Constru-	ction		
		瀬楽 亨	(慶應義塾大学大学院生)	
4.	Reference and Metaphor in Copular Sentences: Descr	iption of Metapho	r	
	in terms of Extended Mental Space Theory	中川奈津子	(京都大学大学院生)	
5.	現代朝鮮語の助詞 '-(이)나', '-(이)라도' に関す	する一考察		
	―文のタイプとの相関を中心に―	平 香織	(沖縄国際大学)	
6.	実験に基づく「流れる」の語形の意味グループ	鈴木幸平	(神戸大学大学院生)	
		李 在鎬	(情報通信研究機構)	
		黒田航	(情報通信研究機構)	
7.	コピュラ構文の文法化	神田靖子	(大阪学院大学)	
8.	「説明」を表す日韓語の名詞性述語の対照研究	金 廷珉	(東北大学大学院)	
	―「のだ」と「kes-ita」を中心として―	堀江 薫	(東北大学)	

講演 (15:45~18:10) [2号館3階:2-301 (ハイビジョンシアター)] 司会 林 礼子 (甲南女子大学) [会長就任講演] 講師紹介: 小泉 保 (日本言語学会顧問) 澤田 治美 (関西外国語大学) 講師: 演題: 認識的モダリティをめぐって:語用論的アプローチ (休憩) [特別講演] 西光 義弘 (神戸大学) 講師紹介: 講師: Jacob L. Mey (Professor Emeritus of Linguistics at the University of Southern Denmark) 演題: EVOLVING DISCOURSE: SPEECH ACTS AND SEQUENTIALITY

閉会の辞:澤田 治美(関西外国語大学)

懇親会(18:30~)聖マーガレット館2階(会費 4,000円)

日本語用論学会第9回大会「特別講演」での講師の変更のお知らせ

ニュースレターNo.16(p.4)でも、お知らせしておりますように、日本語用論学 会第9回大会特別講演での講師に予定しておりました Hartmut Haberland 氏 が先月末に病気で倒れられ、その後は順調に回復に向かっておられるとのこと ですが、大変残念ながら来日していただくことは不可能となりました。その後、 運営委員会で善後策を検討し、急遽、代わりに Jacob L. Mey 氏を今回の講演者 としてお招きすることになりました。Mey 氏は南デンマーク大学言語学科名誉 教授で、(Haberland 氏と共に) 1977 年に Journal of Pragmatics を創設され、 その編集委員長をされています。Mey 氏は多くの皆様が良くご存知の大変著名 な方で、大変お忙しい中、このような緊急事態での要請を快くお引き受けいた だいたことは大変あり難く、学会にとっても名誉なことと思います。この貴重 な講演の機会に、是非多くの皆様のご参加をお待ちしております。

.....

日本語用論学会第9回大会「特別講演」(2006年12月9日(土))

```
会場:桃山学院大学
```

講師:Jacob L. Mey (Professor Emeritus of Linguistics at the University of Southern Denmark)

演題: EVOLVING DISCOURSE:SPEECH ACTS AND SEQUENTIALITY

ABSTRACT

Traditionally, words have been considered as having an immanent, magic power of healing or destroying, of salvation or damnation; as exerting a good or bad influence on one's surroundings; as being able to produce transformations of all kinds (including miracles); and so on. In a more analytic mode, the idea of human acts of speech having an inherent, illocutionary 'force' has been explored by the speech act theorists. Speech acts have usually been thought of as having to do with the words spoken and their illocutionary force, respectively their perlocutionary effects, along with certain conditions for their 'felicitous' performance by the individual speaker. The theorists, however, could not always convincingly show what this 'illocutionary force' or 'perlocutionary effect' stood for in a concrete speech situation.

To complement this classic theory, as it has been developed by Austin, Searle, Grice, Levinson, and others, I have introduced the notion of 'situated speech act', or *pragmatic act*, to capture all the 'active' aspects of the entire speech situation, or, as it is often called, the *discourse*. Here, the stress is on the total context of speech (the 'situation'), rather than (more or less exclusively) on the words themselves (Mey 2001). However, if we consider human speech as it develops in a situation, we also need to pay more attention to the *evolving* aspect of discourse, that is, the situational conditions for pragmatic acting, inasmuch as they relate to the temporal and spatial aspects of our acts. The notions developed by Conversational Analysis under the name of 'sequentiality' and 'adjacency', while offering a useful novel perspective, have not yet been fully exploited as to their potential for the description of human discourse as it evolves in space and over time.

The present paper is an effort to remedy this deficit by showing how pragmatic acts in discourse (in addition to the spatial dimension) need the temporal dimension of *sequentiality*, in order to be correctly understood and effectuated, that is: to function properly in accordance with the shared co-construction practiced by the participants of the situation. Here, the 'magic' is not in the words as such (as it was in the ancient practices of divination and witchcraft, or even in classic speech act theory), but in people's co-wording a situation, and acting correspondingly.

REFERENCE

Mey, Jacob L. 2001. *Pragmatics: An Introduction*. (Second, entirely revised and greatly enlarged edition). Oxford, England & Malden, Mass.: Blackwell Publishers. [1993]